

新潟県

公民館月報 2

平成8年2月号 通巻第516号



特集 危機管理とボランティア

視 点 親子の楽しい映画会

ひろば これからの地域スポーツクラブと期待される指導者

実践記録 どちおライウリイスクール

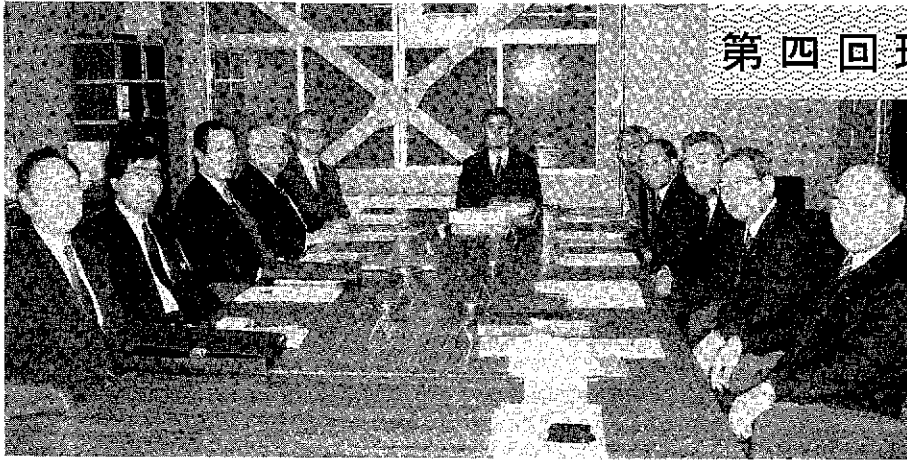
サークル交流 越後しるね風絵の会 朝日村コアラスクール

素顔拝見 長谷川優子氏 (加茂市) 樋口具範氏 (中里村)

表紙 親子ふれあい書きぞめ大会

中郷村公民館提供

第四回理事会開催



市町村負担金の増額要望実現

研修事業の充実を条件に

公民館振興市町村長連盟の支援による

一月十九日(金)、平成七年度第四回理事会が新潟市中
央公民館会議室で開催された。

主要議題は、「市町村負担金の増額要望」実現にとまな
り、新規事業への取り組みにあった。

この市町村負担金の増額要望は、当連合会の懸案の課
題であったが、県公民館振興市町村長連盟(会長近寅彦
新発田市長)の格別の支援により、七十七万円の増額が
認められたものである。

一、新規事業の実施に ついて

市町村負担金増額を
認められた七十七万円
のうち七万円は運営費
とし、他の七十万円は
事業費として認められ
たもの。また、その事
業は職員・公民館運営
審議委員を対象とした
研修事業にあてる条件
がついている。した
がって、新規に三つの
の研修事業が行なわれ
ることになり、そのた
めの事業の検討につい
て審議が集中した。
なお、来年度新規に取

り上げられる研修事業は次の三
事業である。

- ① 生涯学習推進のための公民館プログラム開発と施設ボランティア育成研修
- ② 生涯学習のための公民館の専門的資質育成研修
- ③ 生涯学習のための公民館運営審議委員会研修

二、県公民館大会開催準備の中 間報告

県公民館大会開催日は七月二
十六日(金)に決定。会場は栃
尾市市民会館で開催されること
になった。
主管は、栃尾市、見附市、三
島・古志郡の連絡協議会があた
ることになっている。

主管公連では、公民館誕生五
十年目を迎える節目の年を記念
して、公民館大会を有意義なも
のにするため、基調提案にはス
ライドを用いて過去を振り返り
先輩の功績に学びつつ、これか
らの公民館の在り方について課
題を浮き彫りにする計画。目下
周到な準備が進められているこ
との中間報告があり了解され
た。

中越 主事部会大活躍

意識・実態調査への取り組み

本年七月二十六日(金)、栃尾
市市民会館を会場に開催予定の
県公民館大会の開催要項づくり
に、主管公連では、昨秋以来度



中越公連主事部会代表者会

三、その他
(1) 継続審議となっている運営
検討委員会各申の取り扱いはつ
いては、次回に続行して結論を
見いだすことになろう。
(2) 社教法二十三条問題、つま
り民間の営利目的教育産業への
公民館貸与問題について、長岡
市中央公民館における公民館運
営審議会の審議状況が資料とし
て紹介されていた。

重なる準備会を持って精力的な
検討が進められている。

とりわけ、中越地区公連の主
事部会が中心となって基調提案
づくりを進めていることが出色
の活動であろう。

大会参加者の一人ひとりがあ
らかじめ問題意識を持って参加
してもらうために「これからの
公民館の在り方」に関する意
識・実態をまとめ、研究討議の
柱づくりをしたいと、調査活動
に取り組むものである。

なお、調査の対象は全県規模
を構想していること、調査時期
は三月中を予定しているなど
で、間もなく調査用紙の配布と
なるので、その節は特段の調査
協力をと訴えている。

平成八年度国庫補助額決まる

公民館関係予算について

(1)施設設備費		(単位 千円)	
区 分	平成7年度予算額	平成8年度予算額	
公 民 館	47館@50,000	37館@50,000	国債 10館
一 般	15館@21,500	11館@21,500	国債 4館
(過疎等分)	19館@85,000	14館@85,000	国債 5館
大 型	—	14館 @5,000	
大規模改造 (補強)			
合 計	4,287,500	3,953,100	

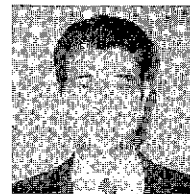
(2)事業費		(単位 千円)	
区 分	平成7年度予算額	平成8年度予算額	
地 域 社 会 教 育 活 動 事 業	844,800	844,800	
330か所 @2,560		330か所 @2,560	
公 民 館 改 造 事 業	—	103,662	
信 用 協 会 等 推 進 事 業			
通 信 等 推 進 事 業			
星 野 政 夫 等 推 進 事 業			
衛 生 民 衆 啓 蒙 事 業			
合 計	844,800	948,462	

全国公民館連合会では、昨年夏以来、公民館関係国庫補助の増額に向けて地道に運動を続けてきたところであるが、昨年末に次のとおり文部省予算が決まった旨速報があった。

表中の「国債」とあるのは、国庫負担債務行為の略で、公民館の建設が平成七年度八年度二か年にわたる事業の場合、補助額は七年度に決定するが、交付は八年度になる。よって、一見すると補助館数が平成八年度に減少しているように見える。

これからの地域スポーツクラブと期待される指導者

倉崎 廣一



生涯にわたってスポーツを楽しむ人が多くなってきたが、スポーツをやろうと思った時、自分が住んでいる町に、入りたいと思うスポーツクラブがあるかどうか。

こうした住民のニーズに答えるため、スポーツを楽しむ環境づくりが必要である。とりわけ、地域のスポーツクラブは、生涯スポーツの入口であり、主要な役割をになっているといえる。

昨年、文部省は「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」を打ち出した。生涯スポーツを振興するため全国に九つのモデル市町村が指定された。

この事業は、学校開放施設や各種スポーツ施設を利用して、子供から高齢者まで、さらに障害者・スポーツ愛好者と幅広い層の人々が一緒になって、複数層のスポーツを楽しんでもらおう、つまり、欧米型総合スポー

視 点

私と公民館との付き合いは、昭和二十五、六年頃だったろうか。当時見附町の公民館は旧実践女学校の一隅にあり、館長丸山直一郎(元県会議長)主事に松本十三雄、皆川厚、江部譲二(現市助役)星野政夫(敬稱略)ら

親子の楽しい映画会

徳橋 正作

文化の拠点としての行事は多岐に亘り(その後、準優良。優良公民館として受彰)その中で映写機をリヤカーで運んで各地区で映画

も行事などと呼び出され映画会を開催した。その頃は家庭の電力容量が5A、10Aで暗い所で準備したり、ヒューズを持ったりもした。また、新人職員

から希望者を募り「16ミリでまわおこし」を計画した。一人でも多くの子供と親達に映画の良さを知ってもらおう、と映画会をすることにした。

親子が参加できるのは昼か夜か、周知する為にはどうすれば良いか、映画を通して何かできないか等々議論百出の中で、今は月二回

会を開催、私もそのお手伝いをした。当時はどこでも大人気、大盛況だった。後、昭和三十

五年・六年頃に16ミリ映写技術免許試験に合格、晴れて技術者として各町内の祭りや子ども

の映写操作に途中救援を行ったりもした。ところがテレビの出現ですっかり映画の人氣が落ちてしまった。

そんな中で公民館が映写免許取得者の再講習を行い、参加者の中

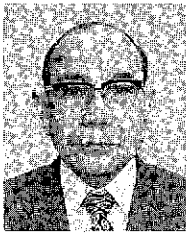
(第二、四、十、曜日)午前十時からと九人のメンバーで映画会を開催し、多くの反響を呼んでいる。

(新潟県子ども会連絡協議会副会長)

ひ ろ ば

特に、スポーツクラブのリーダー、スポーツ指導者にはより幅広い力が求められ、単に技術を教えるというだけでなく、自らも共に楽しむ人であり、スポーツの楽しさを知り、生涯続けるためのきっかけづくりを支援する姿勢が必要である。今日的には、技術と情熱、加えてスポーツマンとしての人間性が期待されているといえる。

(村上市中央公民館 運営審議会委員長)



会を開催、私もそのお手伝いをした。当時はどこでも大人気、大盛況だった。後、昭和三十

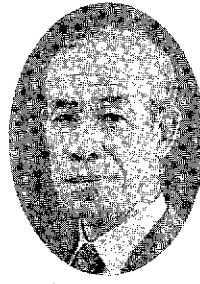
五年・六年頃に16ミリ映写技術免許試験に合格、晴れて技術者として各町内の祭りや子ども

の映写操作に途中救援を行ったりもした。ところがテレビの出現ですっかり映画の人氣が落ちてしまった。

そんな中で公民館が映写免許取得者の再講習を行い、参加者の中

の課題 とボランティア

会長 樋浦忠吉



樋 浦 氏

執筆者紹介

樋浦忠吉氏は、本県義務教育界で名を馳せた方。とりわけ、青少年赤十字運動(J.R.C.)の第一人者で、数少ない先達である。昭和六十一年三月、新潟市立東新潟中学校長を最後に定年を迎えるや郷里西川町の公民館運営審議会委員を引き受けられ、現在は会長として、公民館運営に尽力されている方である。

一、ボランティア活動と危機

阪神大震災から数えて満一年が経過した。一瞬のうちに、六千三百余人もの尊い生命を奪い、海と六甲の山々の街を壊滅させ戦後最大の震災となった。この災害で数多くの課題が提起されたが、ボランティア活動もその一つである。

個人、ボランティア団体、非政府国際協力団体(NGO)など、延べ百数十万人(推計)に及ぶと言われている。被災から十七日経過した二月十三日、新潟日報は、「阪神大震災の傷跡」の最終回で次のように報道している。

「(前略)震災がなく、防災意識が薄いといわれた関西で、混乱する行政をよそに、市民自らが余震の恐怖に耐え驚くほど落ち着いた行動で危機管理した。(中略)国内外からの支援活動は、人、金、物共に前例のない規模で行なわれた。以下略」

また、同紙一月三十一日「社説」では、「なお広がれボランティア活動」として次の一文がある。「阪神大震災の被災地では、若者をはじめとする多くの人たちのボランティア活動が心の支えになっている。大量の救援物資を避難所に配って回る人たちがいる。自転車に乗って被災

社宅を訪ね、高齢者を安全地帯に導いたり、トイレの清掃を買って出る人もいた。以下略」

「赤十字」の誕生は、一八六三(文久三)年にさかのぼる。一八五九(安政六)年、イタリア統一戦争の際、北イタリアのソルフェリーノの丘近くの教会を中心とする集落であった。

スイスの一青年アンリージュナンが商用で数名と通りかかり、地域の人々と共に戦傷病者の救援活動をしたことが動機となり、組織されたことは周知の通りである。以来活動は発展を続け、人間愛、人間尊重の「人道」を基本原則として世界百五十余国の参加で活動を続けている。前者の例は、現代の文明社会といえども、自然災害に対する脆さや、人々の危機管理の在り方が問われた事態である。後者は、人類社会における歴史のユーマであるが、平和な社会の維持や共存の困難を物語るものである。そして、戦争の悲惨さと生命の尊さを教えるものでもある。

反面、共通していることは、この場面において奇しくも奉仕活動、ボランティア活動が展開されていることである。別に指示されたわけではない。

利益や報酬を求めてもいない。全く予期しない事態の中で、現実に即した行為がなされたのである。なぜであろうか。

これは、人間の誰もがもつ潜在的な「生きる」ことへの願望「共存」への感情、「人間愛」の発露なのであろうか。

古代エジプト社会ですでに、「飢えたる者には食を」「渴きたる者には水を」などの定めがあったと言われている。言うまでもなくこの二つの事例の他に、人類の歴史の中で数多くのボランティア活動の実践がある。

そして、その底を流れているものは、人間の「生きること」への問い直しと同時に、貴重な文化の一つでもあろう。

二、ボランティア活動の現状と問題点

現在、わが国ではボランティア活動に対する関心が高い。各地の活動事例なども数多く報告されている。

戦後の状況について、阿部志郎氏(横須賀基督教社会部長)は次のように言っている。「戦後の社会福祉は、国家責任の下で国民の権利として認められ、それへの対応に専門性が要求されるようになった。そして福祉を行政の責任とする意識も

強まったが、一九七〇年代になると、社会福祉への市民参加の一形態として理解されるようになった。(中略)市民福祉の受け手として存在するのではなく担い手と転化する必要性を自覚され始めた。(以下略)」

この中で、受ける立場から、担い手としての変化が目目に値するであろう。

また、曾野綾子氏は著書「二十一世紀への手紙」の中でボランティアについて次のように述べている。(原文要約筆者)

「一九九〇年代日本の産業界、教育界でも、ボランティア活動が急に本気になって取り上げられるようになった年代である。それは、高齢化社会、第三世界の貧困などが問題になったことにもよる。(中略)しかし、その動機はかなり不純である。企業イメージを高めるなどと言う人もある。(中略)」

こういう日本人を作ったのは、子供たちに、人に尽くすことは楽しくて温かいものだと思えなかつた教師や、「ボランティアなんかするひまがあつたら、もっと勉強をしつかりなさい」と言った強欲な母親たちの責任である。」

曾野氏の指摘は、日本社会におけるボランティアの基本にかかわる問題提起でもある。

当面の公民館 特集 危機管理 西川町公民館運営審議会

る。また「社会奉仕や社会活動をしていいる時」は二十歳代前半では〇・六％、二十歳代後半では一・八％と著しく低くなっている。

しかし、平成六年版青少年白書によると、ボランティア活動への参加意欲八十％以上である。しかし、実行しているのは五％にとどまっているという状況である。十年前のこの種の調査と重ね合わせると、問題は条件整備にあると思われる。

以上、若干の資料を手がかりに現状と問題点の一端をとらえてみた。要約すれば次のようなことが言われよう。

第一は、ボランティアに対する基本的な考えがあいまいである。「人のために」とか、「してやる」のではないと言いながら、抜けきれない。私は、「自らの意志で他人の為になる活動を実践し、人に尽くすと同時に自分も成長させること」と考えている。

この考えが不安定であるため阪神地区で、大学生男子が「ひつぎ運び拒否」や多忙な医師に「次に何をしたらいいか」といらいち聞いたり、「手伝いしたら宿や食事は出してくるのか」という状況が現われる。

第二は、前項にも触れたが、自分の意志で決定することであ

る。したがって、無償で行動することを原則とすることである。

第三は、ボランティア活動は相手をよく知って、その求めに応じた活動が基本である。

以上の点を原則にし、状況に応じた活動を期待したい。

三、公民館の取り組み

各市町村の社会教育推進センターとしての公民館は、現在多くの課題を抱えている。

特に近年の社会変貌や、人々の価値観の多様化、生活様式の変化などによる影響がある。そのため、地域における「生涯学習計画の策定とその推進」「学校週五日制の施行による家庭、地域の対応」「高齢化の進む状況への取り組み」などがあげられる。

中でも、これらの課題解決のために、行政的な諸施策と共にボランティア活動の導入による「コミュニティづくり」は各地域共通の古くして新たな課題といわなければならない。

以下、その解決の方策について提言したい。

(1) 地域課題の把握

結論からいって「地域の見直し」が大前提であろう。各地区共通の課題は、乳幼児から高齢者に至るまでの生活上の諸問題である。例えば、子育てについての親の悩みや拒否的反応、家

庭生活の崩壊の問題、高齢者の自殺などが挙げられよう。しかし、これらの諸問題は、災害などのように顕在的なものは少なく、底流として、また陰になりながら着実に進行していることが多い。

現在、日本全国で社会問題となっている「いじめや不登校」「性非行問題」「万引き」等はその反映と言って過言ではない。このようにとらえてくると、

市町村公民館は「危機的場面」の中にあるといわれよう。これはまた、自治体としても当然のことである。この認識の下で、諸調査、面接、意見聴取などによって実態をとらえたい。

こうして捉えた「実相」に基づく課題に対し、行政で対応すべき方策、ボランティア活動で実践する領域、その他の側面などを吟味し、当面の対策と長期的対策などを調和的に企画しその推進を図る必要がある。

各地域(市町村)の課題解決の一つとして、ボランティア活動を導入する場合、次のような方策を提案したい。

① 啓発的活動の促進

ボランティア活動について正しい認識をすることが不可欠な条件である。このため、広報活動、各種会合における事例発表と評価などを紹介する。さらに

多様な活動事例、活動の場について情報を提供し、理解を深めることが大切である。

② 募集、要請活動の推進

公民館は、地域の課題解決の計画に基づき、広く地域の人々にボランティア活動への参加を呼び掛ける必要がある。ともすれば、行政側、住民共に呼びかけや参加をためらっている場合が多い。特に住民はその必要性を知らないこともある。ボランティアが自発性を原則とするならば、その必要性を訴えることは有効な条件であろう。特に、ボランティア活動は、特定の人

が特定の施設で活動するというような理解に流れやすい中で、多様な活動事例、様々な活動の場所、時間、人数等の紹介は大切な要件となる。

③ 組織化、育成事業

ボランティア活動は、その性格から、個人的活動、グループなど集団活動といえる。各地域はそれぞれの実態に即し、必要に応じて連絡や情報交換を行い、必要によって組織化することも大切である。

また、講演会、研修会の参加にも配慮し、活動する人々の資質向上にも心したい。

「愛の心」を基盤に「共に生きる」というボランティア活動のさらなる発展を期待したい。

実践記録シリーズ(4)

元気な村づくりに向けて

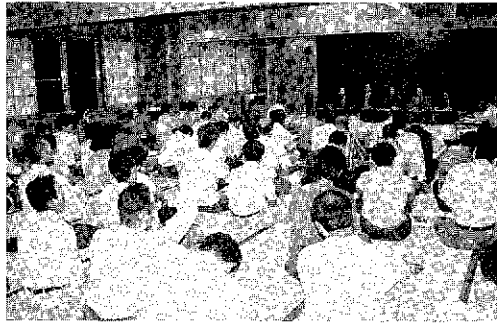
とちおライブリースクール

栃尾市公民館

栃尾市公民館本館と市内の八分館は共催で、暮らしやすい地域づくりを目的にライブリースクール(いきいき教室)を開催した。

地域住民が一堂に会して、集落内の問題点を話し合い、地域の活性化につなげようという趣旨である。

この教室には、行政機関の市

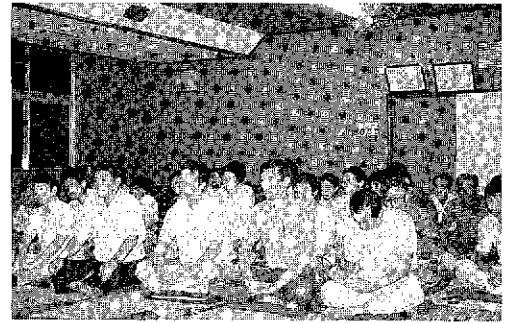


東 谷 会 場

当局(市長、助役、各課長)の参加も得ることができた。参加者の募集、当日の運営は八分館が担当し、資料の作成・当日の記録等は本館が行った。夜の教室にもかかわらず、参加者は女性百五十名を含め四百二名(八会場合計)に達した。まず、教室の様子を紹介する前に、栃尾市の近況について簡単に記したい。

近年、若者の市外流出により高齢者世帯が増え、残された老夫婦もいづれ都会のことものものとへ引っ越していくという過疎化の典型パターンのまった大にある。人口も最も多かった時代と比べ、約一万人強の減少で、現在約二万七千人である。どちらかと言えば、市全体がこの数十年間で疲弊の一途をたどってきた感がある。

しかし、数年前から市では観光の推進を打ち出し、「杜々の森」名水公園の整備等により年



中 野 保 会 場

間数十万人の観光客が訪れるようになった。

また、市では文化・芸術を奨励し、昨年の十一月には市民が待ち望んだ美術館もオープンさせた。そのほかにも、世界の第一線で活躍する音楽家による市民コンサートを毎年開催し、市外からも沢山の音楽ファンがかけつけて来るようになった。

また、各集落においても創意工夫をこらしたイベントを開催し、自主的に元気な村づくりを展開しはじめている。例えば、「下米伝のほだれ祭り」「半蔵金のそば祭り」のほかユニークな「上米伝の合格祈願祭」などである。

少しずつではあるが、確実に市民の心に「やればできる」と

いう自信のようなものが芽生え始めてきた。そんな中でのライブリースクールの開催であった。

まず、教室でどのような意見が出たか、主なものを列記したい。

- ① 生活環境の整備
- ② 教育問題
- ③ 農業基盤の整備

特に生活環境の整備においては、山間集落に水道が入っていないために、夏の湧水期には飲み水さえなくなる年があるとのことであった。もちろん、洗濯もできず、風呂も沸かせない訳である。これについては、市から農林関係の補助事業の紹介があり、参加者からは質問が殺到していた。全集落が同時という訳にはいかないが、話し合いがまとまった地域から実施されていくものである。

都市ガスも必要だという意見があったが、いづれにしても受益者負担が伴うものであるから今後十分に各地域で検討する必要があると感じた。

教育問題については、過疎化から市内に七校あった中学校が二校に統合されて間がないため通学路の街灯の設置や歩道の整備が途上であることからの問題提起であった。これらは、こ

も安全確保の意味からも早急に解決されなければならない問題である。

会場には市当局も参加していたことから対応がなされるものと思うが、すべて行政にまかせるのではなく、簡単な看板等は地域において設置することも必要であろう。

そのほかには栃尾市が独自に行っている奨学金制度の拡充を求める声も多かった。

生活環境の整備は過疎化にストップをかけるためではなく、今、住んでいる自分たちの生活を良くするためにやりたいというところ、そして特に高齢者に快適な暮らしを享受して欲しいが高齢者世帯がそのために投資をしていくことは難しいのではないかと、いような意見が今でも心に残っている。

最後になるが、自分たちの村を自分たちの手で、元気な村にしようという気持ちだが、地域づくりを進める上で特に大切であると感じた。

公民館としては、今後本館と分館で連絡を密にしながら、コミュニティを視点に捉えた教室の開設により、「元気な村づくり」のお手伝いをしていきたいと考えている。

サークル交流

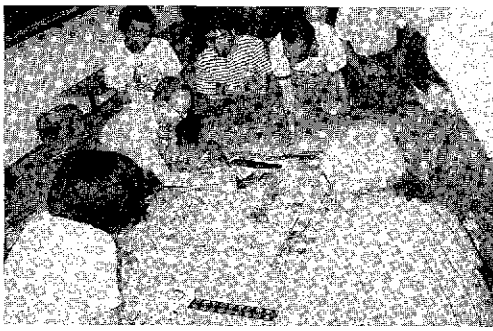
あらゆる機会に

参画をモットーに!

越後しろね風絵の会

平成五年、公民館主催の「風絵講座」の受講生十一名でグループを作って二年半、伝統の風絵を継承し、広めたい願いから発足しました。まだまだヨチヨチ歩きですが、会員の勤めの傍ら月二回(夜)の定例会で楽しく技術の修得と向上に努めているところです。

ただ、目標がないと進歩もないことから、あらゆる機会に参画するよう努めており「しろね



大風と歴史の館「開館記念の風フェスティバルでは、三百枚近い風絵・ミニ風を製作し、来場者よりご好評をいただきました。

さらに、発表の場は、秋の文化祭、病院並びに年末年始の地元郵便局で風絵展(一ヶ月間)を開催し、今では恒例の事業として取り組んでおります。

また、昨年は施設の身障児五十名全員に風を送って大変喜ばれており、これからも風を贈り続けたいと思っております。

今後、伝統ある風絵の関心を広め、若い世代にまで継承していくよう活動を推進します。

(越後しろね風絵の会 会長 樋口光雄記)

お父さんも一緒。

皆で子育て楽しいナ。

コアラスクール

このコアラスクールは、保育園児がいる家庭を会員として毎月一回学習サークルを開いています。地域の中で、家族揃って子育てを楽しもうをモットーに、お母さん同士集りながら子育てで困っている事や、知りたいう育児情報などをもとに計画し



ています。(その集りで出る話の方が、参考になったりする事も多いのですが)毎月テーマを変えて親子で参加するものや、親だけの学習会も行っています。

今、しきりとお父さんも一緒に子育てに参加しましょう、と言われていますがどう接しているかわからないお父さんは、戸惑うばかり。そんなお父さんでも面目躍如とばかりに親子レクは大人気。お父さんの方から「またあの親子レクに参加したいな」と。計画を立てたお母さん方は、思わずニンマリ。

こうして朝日の村に、お父さんも育児に参加する楽しい笑い声が響きます。

(朝日村公民館 小川美幸記)

加茂市公民館主事

長谷川優子 氏

新規採用と同時に公民館に配属され4年になる彼女は今では一番のベテランです。

体型は、やや小柄ではあるが持ち前のエネルギーな行動力で、視聴覚教育・女性教育・子ども教育・地域活動や各種教室など、沢山の仕事をバリバリこなしています。また、彼女は絵を描く天才でもあり(加茂市展での市展賞をはじめ



は絵を描く天才でもあり(加茂市展での市展賞をはじめ

素顔拝見

中野 徹 記

中里村公民館主事

樋口具範 氏

わが課で唯一独身貴族の樋口さんは、公民館二年目の若きエースである。担当のスポーツ事業を精力的にこなしながら、得意なパソコンの知識を生かしパソコン教室の指揮も執っている。二十七歳と若い彼は、子ども会のリーダー研修に行っても大もて。すぐに子どもたちの輪の中に入って行ける。「なかなかやるねー」といえば「もう少し年が上だと……」と彼。

そうそう今年の七月には、生涯学習の一環としてプラネタリ



ウムがU モール(コミュニティ施設)に導入された。

彼にも白羽の矢が立ち、他の主事と共に新しい分野の仕事にも精力的に取り組んでいる。すばらしい外部の協力者も得て、はりきって星と奮闘している。スポーツに星と持てる力を遺憾なく発揮している彼は、いま星を眺めながら「スター」気分である。

(中里村公民館主事 岡村満子記)

公民館利用者の安全のために

公民館の避難訓練

小須戸町中央公民館で

小須戸公民館報第四九三号
(平成八年一月十五日号)から転載



▼中央公民館で 避難訓練▲

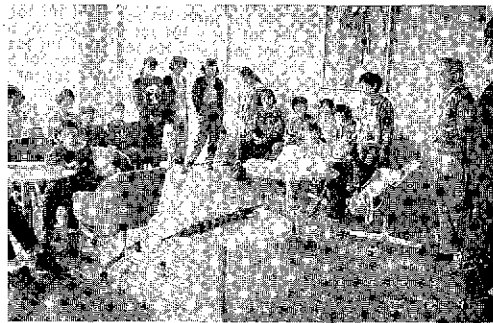
十二月九日(土)中央公民館において、避難訓練を実施いたしました。

当日は、小林消防士立会いで親子チャレンジ教室や図書室利用者からも参加してもらいました。

三階ホールから出火したとの想定で非常ベルを鳴らし、消防

署へ通報→一斉放送→避難者誘導という訓練をおこない、その後小林消防士より避難時の注意点や家庭における火の取り扱いについて指導を受けました。

中央公民館では、これからも避難訓練を定期的に実施し、公民館利用者の方の安全に つとめていきたいと考えています。皆さん火の取り扱いには充分注意しましょうね。



訓練終了後、消防士から指導を受ける利用者

閑話「ごったく」って？

ある日の事務局風景である。編集子の机の上に、良友篠田朝隆氏(元小千谷市公民館長)から贈られた『ふだんとごったく』が置かれていた。

この事務室に同居している三つの教育関係団体の事務局員たちが、その本の書名を見ては、「ごったく」ってどういう意味？と、入れかわり立ちかわり不思議そうに見ている。

無理もない、彼や彼女たちはすべて新潟市かその周辺の蒲原もんばかりだから、ドイツ語とも思ったのに違いない。

魚沼育ちの編集子には、いささかの違和感のない、それどころか、長らく疎遠にしていた旧知に出合ったような懐かしさを感じた。

じるのである。方言には、人と人とを結びつけるこんな魅力があったのだなあと再認識したひと時であった。

あとがき

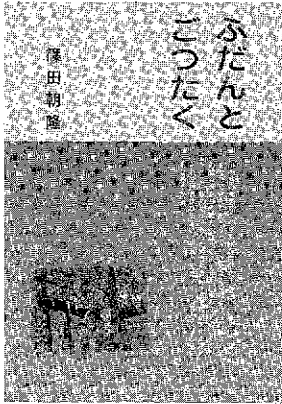
◆各地に豪雪被害が続発しています。しかも、人命にかかわる被害が多いようですが、衷心からお見舞い申し上げます。それにつけても、公民館の危機管理に関する学習の重要性が指摘されます。

近年の豪雪地では、自治体が率先して、克雪・利雪の積極的生き方を提唱していますが、その根底に「支え合って生きる」ことを柱に据えた生活の見直しが必要になります。公民館は、そのための学習が考えられなければならないと思います。(上村)

紹介図書

ふだんとごったく

篠田朝隆著



著者篠田朝隆氏は、本書の巻頭言で「地域に長く住み着いた人々が営々として作り育ててきた文化が、社会の急変貌のなかで、消滅あるいは散逸してゆくのを憂い、なんとか記録し、後世に残しておきたい」という気持ちで本書を出版したと、その熱き思いを記している。

内容は、年中行事、部落と家、稲作と儀礼、嫁とり婚とり、などのほか、子供の遊びや方言など合わせて十四のジャンルにわたっている。

写真による解説資料も豊富で貴重な研究誌である。A5判 360頁 希望の向きは篠田氏に直接連絡されたい。小千谷市 大字横渡一六四 〇二五八八二一七三九九

表紙解説

第九回親子ふれあい書きぞめ大会

今年で九回目を迎えた親子ふれあい書きぞめ大会。会場となった岡沢小学校の体育館は、真剣な子どもらと、その様子を見守るお家の人たちで熱気ムンムンでした。

(中郷村公民館)

発行所 新潟県公民館連合会

〒951

【新潟市川端町2-9・県林業会館内】

【TEL・FAX (025)224-6073】

発行人 会長 細川 仁

編集人 事務局長 上村 捨二郎

【定価1部150円 年共1,800円】